
路地裏の磯巾着

西くん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

路地裏の磯巾着

【Nコード】

N4352P

【作者名】

西くん

【あらすじ】

『円山の妖怪』から始まる高校生の物語

噂話

『円山に妖怪が出る』という噂が出始めたのは、ちょうど北海道神宮祭の日だった。

男女数十人が手をつないで仲良しこよしの列を作りながら山を登っていたところ、いきなり狐の面を被った浴衣の美女が現れ、鼻息荒く話しかけるといきなり消えたという。

「お前……恥ずかしくねえの？」

これは俺。

「いや。いやいやいや本当なんだって。いきなり、体が鴉になっ
さ」

これは俺の友達の阿呆、鈴木証言。

「鴉って……」

そして今日、俺は朝来るなりこんな馬鹿げた話を何百回と聞かされうんざりとしていた。

「……訂正するからちょっと待っててくれ。ええと、『いきなり消えた』を『鴉に』……」

携帯を力チ力チと動かす私をみた鈴木は、なんとも形容しがたい顔をした。

「何言ってるのお前？」

お前もな。

「お前含む俺のクラスの馬鹿共の噂を分かりやすく纏めてんだよ。ありがたく思え」

「いや、だから本当なんだって。」

「二回も同じ事を言ってるじゃねえ。登校の時に何回言われたことか」

少なくとも10回以上。

「だから本当……」

睨んだ私を見てか、鈴木は一度言葉を切らし、

「……………今日、円山行かない？」

「……………散々言葉を考えた結果がそれかよ。」

「……………まあ。いいよ、行こう。」

私が答えると、

「あ、マジで？」

予想外にも嬉しそうな反応をした鈴木。

ホモかこいつ。

「ただし。今日俺と登山してなんも無かったらこの高校に広まってる噂を全部キレイさっぱり除外しろ」

私が出した交換条件に、簡単に頷く鈴木であった。

水モの行進

円山の山道に配置されている地蔵の数は知らないが、それでも夜の山道のあちこちに地蔵が顔を覗かせているのは少々不気味だった。

「うわぁ・・・ちよつと、怖いんだけど」

どこか女口調の鈴木。

気持ち悪い事極まりない。

「うるせえ。2 m以上離れてろ」

「そんなこと言うなよ。死んだらどうすんの」

「お前の遺志をついで学校に広まってるあの噂を死ぬ気で流布させる」

「さすが！心の友よ！」

言った後、鈴木は黙った。

「・・・しかし、こんな夜の山道からも神宮祭は見えるんだな」
私が横を向くと、木と木の間から神宮の祭の華やかな明かりが見えた。

「・・・鈴木、一つ提案がある。」

歩を止めて私が言っていると、石を蹴って転がしていた（俺に当たった数、登山中だけでも驚きの三回）鈴木が顔を上げた。

「な、何だ？」

「俺は今、ムシヨウに神宮祭へと足を運びたく思う。甘いりんご飴、与えられし天命を存分に発揮する籤。俺は今、それに気をとられてしょうがない。こんなくだらん妖怪騒ぎに時間を使ってるなら、まだそれに時間を使っている方が有意義と言えるだろう」

俺の問いにコクコクと頷く鈴木。

「さつさと下山してりんご飴食おうぜ」

足がガタガタと震わせている様子である。

なんで来たんだ、お前。

「さ、下山・・・」

しょうか。

そう言おうとした瞬間である。

後ろを振り向くと、そこには浴衣を着て天狗の面を被った人間が仁王立ちしていた。

「・・・・・・・・」

私はその時、吃驚しなかったと言えば嘘になる。
しかし、

「・・・・・・・・ハロー。ないすとうみーちゅう」

衝撃のあまり外国人のフリをする鈴木には叶わなかったが。

「おう、いええす。ばい」

そして全速力で下山する鈴木の分速はまさに、韋駄天も負けを認めざるをえないだろう。

「・・・・・・・・置いてけぼりかい」

特に恐怖心も何も無いのだが、とにかくこいつから離れたい衝動に駆られる。

こんなに脳が拘束で機能したのは三年ぶりかもしれない。

「・・・・・・・・あのう、そのお面、素敵ですねえ。神社で買ったんですか？」

「・・・・・・・・く」

「はい？」

「くはは、あつははははは。」

突然に爆笑しだす天狗。まさかの雌である。

そうか、きつとこいつは妖怪だから俺の言う事やる事が全て面白く感じるのか。

「ええと、何が可笑しいんでしょうか？ー＋ーは2ですか？三＋参は9？アアレエ、二乗しちゃったぞう、なんつって」

「なんつってーだって。あははははは」
むう。

「あのう、貴方の住処に入ったことはお許しいただきたい。私は礼儀がなつてない屑なので、どうか目を・・・・・・・・」

「はは。やあだなあ。君、××君だろう？」

そう言いながら、天狗は後ろ髪で結ばれているのであろう紐を解いて、お面を外した。

私はお面を外した彼女の整った顔を見て、私の記憶の中で一番最も新しい名前を乱暴に掴みだした。

「・・・・あなたは、由真さん？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352p/>

路地裏の磯巾着

2010年12月11日22時36分発行